
クリスマス・イヴの遠き縁

カラリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマス・イヴの遠き縁

【Nコード】

N3105Y

【作者名】

カラリア

【あらすじ】

まだ12月ではないけれど、単発ネタです。

遠い場所に居る二人が、クリスマス・イヴと言う日に繋がった縁。けれど全ては、幸運ではなく。

「はぁ……はぁ、はぁっ……」

12月4日、クリスマス・イヴ。

私はその日、三年ぶりに愛しい人からメールが送られてきた。

「なんで、今まで……どうして……！」

ずっと音信不通だった。

だから、見たときは嬉しさのあまりに、部屋のベッドで飛び上がるような想いだった。

「なん、で……今まで……！」

人ごみを掻き分けるように、私はただ走る。
あの人を最後に見た、私達の約束の場所へ。

「涼……！」

彼との出会いは、ネットゲームだった。

学校から帰ってきて、いつもの様に少しだけログインして、眠るつもりだった。

でもクリスマス・イヴの日に、私は彼と、ゲームの中で出会った。

いつもより少し、ログインしているプレイヤーの数が少なかったあの日。

レベル上げの為にパーティを募集していたあの日。

彼は、私と同じパーティでレベル上げをした、一時的な仲間だった。彼以外のパーティメンバーは、皆それぞれのギルドに入っていたけど、彼だけはどのギルドにも入ってなくて。

私は自分のキャラが所属するギルドが、メンバーを募集しているのを知っていたから、ギルドに誘っただけだった。

『ギルド？ 別に良いけど、接続率は低いよ？』

そんな事を彼は言いながら、勧誘は成功して、彼はあの日から、私と同じギルドメンバーになった。

それからの日々は、レベルの近かった彼と過ごす事が増えていった。接続率が低いつて言ってたけど、接続するといつも彼が居て、一緒に狩りに行って、帰ってきて、私は落ちるからと言って、分かれる毎日。

一ヶ月ほどが過ぎると、私のキャラも彼のキャラもレベルが高くなつてきて、新しいキャラでも作るうか？つて相談してて。

新しいキャラを作ると、二人でふざけあいながら、二人だけのギルドを作つて笑いあつて。

彼がその時、本当に笑つてたかは分からないけど、私は楽しくて。

『へえ。やっぱり学生つて忙しいんだなあ』

現実の話で、私が学校でこんな事があつた、あんな事があつたつて話すと、彼はそんな風に返してきた。

私は少し気になって、彼に何歳なのかを聞いてみた。

『俺？ 今年で15になるけど』

そう聞いて、彼が私の一つ上だって事を知った。
だからこそ、また気になってしまった。

『私14だけど、同じ中学生じゃないの？』

って。

彼はどうやら墓穴を掘ってしまったみたいで。

『あー』とか、『んー』とか言うばかりで、これと言った答えは返ってこなくて。

そんな様子が少し、可笑しくて。

五分ほどすると、やっと答えが返ってきて。

『ちょっとね。事情があつて、学校には行っていないんだよ』
と。

それを聞いた私は、最初、不登校なのかな？、って思った。
だけど、休日になると、彼はいつもログインしていなくて。
そして、ある日突然、彼はログインしてこなくなった。

どうしたんだろう？

そう思った。

何かあったんだろうか？

何か問題を抱えているんだろうか？

そう思うしかなくて。

そしてまた、突然に彼は帰ってきて。

何でずっとログインしなかったの？、って聞くと

『ああ、ごめん。ちょっとね』

って、いつかみたいにはぐらかすような答えしか返ってこなくて如何して話してくれないんだろう。

そんな事を思った、私がいて。

でも彼は、その事を知らないから、以前と変わらず、私の事を聞いたりしてきて。

だから、何でそんなに私の話を聞きたがるの？、って聞いてみた。

『ほら、前も言ったと思うけど、俺ってまともに学校行けてないからさ。そう言う話、興味があってね』

って。

何で？、って、どうして？、って。

いっぱい聞きたい事があつたけれど、でもきつと聞いちゃいけない気がする。

だから、また今度突然居なくなると話し相手が居なくなるからって言う理由で、ちよつと無理矢理だったけど、パソコンのメールアドレスを交換した。

その時はもう、彼と知り合ってから、一年も過ぎていて、私は15歳になって、彼は16歳になっていた。

……そして、いつもと変わらない日が続いて。

『俺、少しログインできなくなるから』

って、突然言われて。

どうして？、って聞くと、やっぱり曖昧な答えしか返ってこなくて。

『メールはするからさ、ごめん』

そう言っで、彼はすぐにログアウトして、それからメールのやりとりが半年くらい、続いた。

彼は気付くとすぐにメールを返してくれて、最初はやっぱり、暇な人なのかな？、って思った。

けど、十分経っても、二十分経っても、一時間経っても帰ってこないときもあった。

寝てるのかなって、思った。

でも、彼がまたゲームにログインしなくなって八ヶ月が過ぎたある日。

彼のメールアドレスから、彼の幼馴染の女の子らしい人から、メールが送られてきて……

私はその時、今までずっと知りたがっていた、彼の事を知った。

彼が中学一年生の頃、死に直面し、九死に一生を得たこと。

その時、メールを送ってきた女の子の、お姉さんが亡くなったこと。4年経った今も尚、その時に負った傷の後遺症に、彼は苛まれていること。

それでも生きている彼は、周りの友人達に助けられながらも、何とか生活をしていること。

女の子にも、その外の友達にも、迷惑をかけながら、一生懸命生きていること。

私は知ってしまった。

最初読んだときは、嘘だって思ったけど。

彼の今まで不明瞭だった事を照らし合わせたりすると、最初彼が口グインしなくなったのは、すぐに入院したからだって事が分かった。友達にその事を話すと、嘘だね、って一蹴してしまったけど。

けど私は、嘘だって割り切れなくて。

久しぶりに彼からメールが送られてくると、そのメールの内容に最初に書かれていた事は、ただ一言、ごめん、と言う謝罪の言葉だった。

着信履歴や送信履歴をみて、妹（幼馴染の妹さん）が話した事は、全部切り捨ててくれて良いという内容も書かれていて。どうして言ってくれなかったの？、ってメールを返すと

『信じてもらおうとは思っていないから』

って。

『誰にも知って欲しくない事だから』

って。

だから彼は、あんなに私の事を——いや、学生の日常生活の話を、聞きたかったのかな、って思った。

私は別に気にしてないよ、って伝えると

『それならいいんだ』

そうやって短いメールが返ってきて。

それから、彼の事に触れずに、いつもとは変わらない日常が戻っ

てきて。

でも、いつもとは少し違って、ぎこちなくて。

二年が過ぎると、私は高校生になった。

そして彼の事を久しぶりに聞くと、何とか入学を果たせた高校を自主退学しちゃった、って、笑っているような感じで、軽く返してきた。

そして彼は、ポツリポツリと、自分の事を話し始めた。

中学に挙がった頃から、私とゲームの中で会おうまでを。

私と出会ってから、今日までの事を。

一〜二時間くらい、ずっと聞いていた。

到底信じられないような事ばかりで、私は戸惑ってしまったけど。何故だか、彼に不信感を抱く事はなかった。

それから一ヶ月もすると、急に彼は音信不通になった。

また？、って言う感覚もあったけど、どうしたのかな？、って心配もあって。

彼から連絡がない日が一ヶ月続くと、やっと彼から連絡が来て。

『前に無断でメール送ってた幼馴染の妹が、死んだ』

その内容に、私は思考を停止した。

彼は、二度も大切な人を失ったのだと、私はすぐに気がついて。彼を慰めるべきだと、私は感じて。

でも、どうすれば彼の心が癒えるのか、分からなくて。

そのまま私は、大学生になった。

大学生になった私は、家族から離れて、都会へと引越した。受験して合格した大学が、都会にあったから、と言うのは、ただの方便。

本当は、彼が住んでいるって言うところに、来て見たかった。そして彼に、会ってみたいと、思っていた。

けど、物事って言うのは上手く行かないもので。

仕送りはあったけど、生活費を稼ぐ為にバイトもしなきゃいけなかったし、他にも色々あって、中々会いに行く機会がなくて。

気がつけばもう、19歳になって。

二ヶ月ぶりに届いた彼のメールには、とうとう20歳になっちゃったよ、なんて内容があったりして。

忙しい中、前に聞いていた彼の住所に、少し無理を通してでも、彼に会いに行こうと決めて、クリスマス・イヴ、彼に会いに行った。

初めて見た街。

引越してきた時に感じた事と同じ、既視感。

彼と知り合ってから、五年も経って、私は初めて、彼と会う。

そう思うと、少し不安があった。

信じてない訳じゃないけれど、もしも、嘘、だったら？

その時は、私はきっと泣いてしまう。

そう思いながらも、彼の家を探した。

そして見つけた、彼の住むというマンションを見上げて。

エントランスで彼の部屋の番号を入力して、呼び出しボタンを押す。ピンポン。

チャイムが鳴って、少しすると、どちら様ですか？、って、女の人
の声。

これが、彼なのかな？、って思ったけど、とりあえず確認する事を
急いだ。

「涼さん、のお宅ですか？」

彼の名を出して。

『ああ、ちよつと待って。涼、お客さん』

向こうから、彼を呼ぶ女の人の声が聞こえて。

『はい。……え？』

変わった後に聞こえたのは、男の人の声。

そして、え？、と言う声。

きっと、彼には私の事が見えているんだろう。

だって、カメラがあつたから。

何年前かに、彼と私は互いが移った写真を、年賀状に写して送って
いたから。

彼は私の顔を、覚えていたんだと思う。

『なんで……』

声を震わせて。

『……今、開ける。エレベーターで上がって来たら、右の一番奥の
部屋だから』

そう言つと、自動ドアが開いて、プツン、と通話が途絶えた。
本当に彼なのか？

本当に事実なのか？

そんな気持ちがありながら、私はエレベーターで上がって、右の一番奥の部屋のドアの前で、チャイムを鳴らした。
ドアの向こうから、ガタガタと少し騒がしい音。
そしてドアがゆっくりと開いて。

「どうぞ。涼のお友達でしょ？　上がって上がって」

エントランスで最初に聞いた女の人の声と同じ声。
きつと、この人が最初に出た人なんだって思った。
綺麗な女の人だった。
少しだけ、嫌な予感がした。

「お、お邪魔します……」

入って、靴を脱いで、上がって。

「こつちよ」

女の人の言つがままに一室に通されて

「っ……！」

私は、初めて、写真ではなく、彼を見た。

「……久しぶり。いや、初めまして、と言ったほうが良いのかな？」

おどけてみせる彼は、あまりかつこいいとは言えないけれど。車椅子に腰をかけていて。

少し長い前髪に、隠れるように残る、額の丸い傷跡が、全て真実だと、物語っていて。

「……えっと、どうすればいいのかな？」

彼は、ばつが悪そうな表情で、脇に立った女の人に言うと

「涼の彼女？ 全く、周りに私とか可愛い女の子がいっぱいいるのに、隅に置けないわね」

なんて、女の人が言って

「はっ、年増が何を言って……ってうわ、車椅子を勝手に揺らすな！」

彼が女の人の悪口を言った矢先に、女の方は彼の車椅子をガタガタと揺らし始めて。

「ほんとう、だったんだ……」

私は真実であった事に安堵したのか、嘘じゃなかった事に後悔したのか、分からなくなつて。その場で泣いてしまった。

その日から、私は彼と会うようになった。会ってから一ヶ月くらいは、ずっと車椅子だった彼は、松葉杖にな

って、二ヶ月も経つと普通に歩くようになった。

でも、足が動かなくなるのは良くある事のように、またいつかは車椅子に座る時がやってくる、って苦笑しながら言っていた。

そして、いつしか私と彼は付き合うようになって。

彼と初めて会った日に居た女の人や、彼の周りの友達とも仲良くなつて。

前途多難なんて思いながら、私には新しい日々が来たんだって、実感してた。

それなのに。

彼は、三年前のクリスマス・イヴに、私の前から、突然姿を消した。

彼の友達に、どうして居なくなったのか聞いて回った。

彼の事を、探し回った。

けれど、彼は何処にも居なくて。

そして私は、初めて好きになった人を、失うという事に、押し潰されそうになった。

「涼……涼っ！」

私は、どうして彼の事を好きになったのか、正直、彼が居なくなるまで分からなかった。

きつと、ネットゲームで彼と出会うまで、長い事一緒に居る友達が居なかったからだと思った。

きつと、彼の事を知るまで、あまり人を信じなかったからだと思った。

私は彼に出会うまで、一人ではなくても、独りだった。そして彼と出会って、私は独りじゃなくなつて。それはきつと、彼も同じで。

けれど、彼が私に亡くなつてしまった幼馴染を重ねていただけなんだろうけど。

私は、彼が、好きだった。

「はあ、はあっ……！」

どこにでもある、小さな公園。

そこにつくと、息を少しだけ整えながら、彼の姿を探す。

この公園は、車椅子に座っていた彼と、私が約束を交わした場所だった。

彼とやっと出会って、彼と付き合い始めて。

彼と初めて、対面しながらの約束事を交わした場所。

「涼……」

どこにいるの？

どうして、やっと出会えたのに、あの日、私の前から居なくなつたの？

ただ彼の姿を、公園で探した。
冷たい雪が降る、夜の公園で。

「涼っ……」

どこにいるの？

「涼……！」

会いたい。

今すぐ、会いたいよ。

「……聞こえてるって」

不意に、後ろから、あの声が。

振り替えると、コートのポケットに両手を入れて、マフラーで口元まで隠した、彼が。

「……久しぶり、でいいんだよな」

少し照れ臭そうに、彼はそう言っ

「どうして、居なくなっただの？」

私はただ、それが聞きたくて。

私はただ、貴方に会いたくて。

「……ちよつと、アメリカまで行っ

「そんな事が聞きたいわけじゃない！」

私が聞きたいのは、言い訳じゃない。

「三年前、病院に言ったら、悪化して

「なら、何で皆知らないの！？ 結衣さんも、あかりさんも、黒野君だって、皆知らないのに！！」

アメリカまで行ったのなら、誰かが知ってるはずなのに！！」

どうして、皆知らなかったの！？

「……言える訳、ないだろ」

「……え？」

「言える訳ないだろ！ 今までも何度も死に掛けたけど、今度は本当に大丈夫か分からなかったから！

何度も何度も迷惑かけた皆に、心配かけた皆に、言える訳ないだろ！！」

彼から出た言葉は、彼の心だった。

「俺がこんなになつて、あいつらと知り合つて6年、ずっと迷惑をかけてきたんだ！！」

俺なんかの為に！ 放っておけば良いのに、関わらなければ良いのに！

心配かけないように上辺だけの元気を見せて、でも結局は世話を焼かせるだけで！！

家族ならまだしも、同じ家に居ても家族は俺なんか見ようともしない！

結衣達も、お前も、本当なら俺に関わる必要もないはずなんだ！！

俺は、俺は……！！」

ただ死にたかつただけなのに、と。

頑張つて、と。

一生懸命に、と。

言葉をかける、みんなが優しくすぎるから、と。

ただ、死にたかつただけなのに、と。

「どうして……泣くの？」

彼は、泣いていた。

時々弱音を見せる彼だったけど、けして涙を流さなかった。

涙は枯れたんだって、どっかの小説みたいな台詞を言ってたけど、やっぱり枯れるなんてことはないみたいで。

彼は、泣いていた。

「俺は……」

「……涼」

「俺は……結局、何を言っても、あの日からずっと……」

「もう、いいよ」

「ずっと、助けられなかった事が……！」

もう、いいの。

「あいつの妹も、死なせて、俺は……！」

もう、過去の罪に囚われなくてもいい。

「何度死に掛けても、死ねなくて……！ 自分から死ねるほど、強
くなくて！！」

それでも、生きている。
生きているんだよ。

「……あ、あ……」

そつと、彼の背に手を回して。

「もう、大丈夫だから。私も、涼も」

「ああ……あ、ああっ……」

「私も泣くから。ずっと涼の事知らなくて、ずっと助けられなかつ
た事に、泣きたいから……」

私は彼の胸の中で。

彼は私の胸の中で。

ずっと、幸せでいられるだろうか？

神様は、彼に酷い罪と罰を与えた。

だから恨みたい気持ちでいっぱいだけど。

こうして彼を私に出会わせてくれた事だけは、感謝したい。

クリスマス・イヴの再開のあの日から、五年。

そして、彼が永い眠りについたのは、今から一年前のクリスマス・イヴこと。

重すぎる罪と罰は、少しでも軽くなっただろうか。

私は、今もそう思う。

彼と出会って、10年ほどが経ち、永遠の別れが来てしまったけど、私と彼は、つくづくクリスマス・イヴと言う日に、何かしらの縁があるらしく。

初めての出会いも、初めての対面も、三年ぶりの再会も。そして、彼の命日と、彼と私の子の誕生日も。

なんだか、クリスマス・イヴは、嬉しくて、寂しくなる。

「……誕生日おめでとう、真理」

彼と私の子に、一歳の、ささやかな誕生日パーティを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3105y/>

クリスマス・イヴの遠き縁

2011年11月15日09時08分発行